

三鷹市山本有三記念館館報

号
23
2021年9月

Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report

企画展 山本有三「路傍の石」に描かれた少年

会期：令和3年9月11日(土)～令和4年3月6日(日)

「路傍の石」は、昭和12（1937）年1月から6月にかけて「東京・大阪朝日新聞」（以下、「朝日新聞」）に連載された小説です。

成績優秀でありながら貧しさのために中学校への進学が叶わず、奉公に出された少年・愛川吾一が、苦労を重ねながら懸命に生きる道を模索し成長を遂げていくという物語です。

主人公である吾一の境遇には、同じく成績優秀でありながらも呉服商であつた父の信条から奉公へ出された山本有三「1887—1974」の生い立ちが重ねられています。しかし、学問への思いが断ち切れず奉公先から郷里へ舞い戻った有三とは異なり、吾一は母が亡くなつたために奉公先を出されることになり、父のいる東京へ上京します。紆余曲折を経て文選工の職を得、働くかたわら夜学へ通うようになるという道筋には、有三の人生との関連を見いだすことはできず、創作であることが分かるでしょう。

相次ぐ厳しい現実に直面しながらも、その都度精神的な成長を遂げていく吾一を描いた「路傍の石」は、幼年期・思春期から青年期に至る主人公の成長を描く「教養小説」を企図して執筆された小説であるとも指摘されています。

もともと有三は、「路傍の石」を二部構成とし、第一部では吾一の少年期から青年期（明治30年代）を、第二部ではその約40年後（作品の連載されていた昭和12年前後）を描くつもりであつたと言います。

「朝日新聞」には、「尋常五年生として現はれる作中の主人公が、浮世の波濤を経て成人し、更に愛児の成長に当面するまでの人生記録」（＊1）との予告が打たれ、吾一が成人後に子どもを持ち、親となることが示唆されています。さらに、昭和13年に映画「路傍の石」のメガホンをとつた監督・田坂貞隆は、有三から「一人の少年が七つの段階をこえて成長して行き、最後に自分の歩んで来たみちをふりかえってみたら、実は何もなかつたということを描きたい」（＊2）といいう構想を聞いたことを明かしています。

これらのこと踏まえれば、「路傍の石」は、少年期から青年期を経て中老に至つた男性が、己の歩んで來た人生を省みる作品として構想されていたということになるでしょう。

しかし、同作は複雑な経緯を辿り、当初の構想とは異なる姿へと着地していきます。

「朝日新聞」紙上で第一部終了後、激化する日中戦争の影響から一年以上も第二部を連載することがかなわず、有三は、やむなく同紙での連載を断念します。翌年、掲載誌を「主婦之友」に変え、改稿のうえ再び第一部から連載しましたが、これも、厳しさ

を増す検閲のため自由に執筆することが難しくなり、昭和15年、第一部終了にも至らず筆を折っています。戦後は、「今度こそ自由に描けるはずである」としながらも、社会の急変による価値観の変動からか「前の構想のまゝでは、私には、今日もなお書けない」（＊3）と言い、再び書き継ごうとはしませんでした。

一方で、当初の構想からは逸脱したもの「これはあるものと信ずる」（＊4）とも述べており、昭和22年、書房版『新編 路傍の石』を出版しています。この鱗書房版は、働きながら夜学へ通えることに決まつた吾一が向学の喜びに涙を流すという、一縷の希望が差し込む結末となっています。同書は、その後も多くの間世間に普及し、現在も、小学校上級生を対象とした偕成社文庫『路傍の石』（平成14年5月）の底本として採用され、子どもたちに読み継がれています。

時代に翻弄され、未完に終わつた「路傍の石」は、有三の判断によつて、不屈の精神で自らの人生を切り開いていく「少年」の物語へと姿を変え、時代を超えて多くの人々の心に勇気を与え続ける名作として記憶されることとなりました。

本展では、少年・吾一の姿に焦点を当て、自筆原稿や、連載当時の朝日新聞、映画ポスターなどの多彩な資料とともに人々を惹きつける「路傍の石」の魅力をご紹介します。作品が執筆されたこの洋館で、本展をお楽しみください。

（文芸企画員・学芸員 三浦穂高）

*1：朝日新聞記者「元旦より連載 長編小説『路傍の石』」（朝日新聞昭和11年12月30日）

*2：岸松雄「続・現代日本映画人伝（8）田坂貞隆」（映画評論）3月号 昭和34年2月

*3：『新編 路傍の石』あとがき（鱗書房 昭和22年3月）

*4：前同

*画像…「主婦之友」第22巻第11号（昭和13年11月）

苦労を重ねながら懸命に生きる道を模索し成長を遂げていくという物語です。

主人公である吾一の境遇には、同じく成績優秀でありながらも呉服商であつた父の信条から奉公へ出された山本有三「一八八七—一九七四」の生い立ちが重ねられていると言われています。しかし、学問への思いが断ち切れず奉公先から郷里へ舞い戻った有三とは異なり、吾一は母が亡くなつたために奉公先を出されることになり、父のいる東京へ上京します。紅余曲折を経て文選工の職を得、働くかたわら夜学へ通うようになるという道筋には、有三の人生との関連を見いだすことはできず、創作であることが分かるでしょう。

相次ぐ厳しい現実に直面しながらも、その都度精神的な成長を遂げていく吾一を描いた「路傍の石」は、幼年期・思春期から青年期に至る主人公の成長を描く「教養小説」を企図して執筆された小説であるとも指摘されています。

しかし、同作は複雑な経緯を辿り、
「朝日新聞」紙上で第一部終了後、激化する日中
戦争の影響から一年以上も第二部を連載することが
かなわず、有三は、やむなく同紙での連載を断念し
ます。翌年、掲載誌を「主婦之友」に変え、改稿のう
え再び第一部から連載しましたが、これも、厳しさ

本展では、少年・吾一の姿に焦点を当て、自筆原稿や、連載当時の朝日新聞、映画ポスターなどの多彩な資料とともに人々を惹きつける「路傍の石」の魅力をご紹介します。作品が執筆されたこの洋館で、本展をお楽しみください。
(文芸企画員・学芸員 三浦穂高)

「新編 路傍の石」の最後の五つの章をカットした鱈書房版『新編 路傍の石』を出版しています。この鱈書房版は、働きながら夜学へ通えることに決ました吾一が向学の喜びに涙を流すという、一縷の希望が差し込む結末となっています。同書は、その後も多くの間世間に普及し、現在も、小学校上級生を対象とした偕成社文庫『路傍の石』(平成14年5月)の底本として採用され、子どもたちに読み継がれています。

時代に翻弄され、未完に終わった「路傍の石」は、有三の判断によつて、不屈の精神で自らの人生を切り開いていく「少年」の物語へと姿を変え、時代を越えて多くの人々の心に勇気を与えてくれる名作として

昭和15年、第一部終了にも至らず筆を折っています。戦後は、「今度こそ自由に描けるはずである」としながらも、社会の急変による価値観の変動からか「前の構想のまゝでは、私には、今日もなお書けない」(*3)と言い、再び書き継ぎごうとはしませんでした。一方で、当初の構想からは逸脱したものの「これはこれなりで、今の世にだしても、多少の存在理由があるものと信ずる」(*4)とも述べており、昭和22年、

を増す検閲のため自由に執筆することが難しくなり、

編集
三
〒
TEL

の関わり、文庫における役割等
ころに愛読していたという参加者
集者たちの思いを知ることがで
~~~~~  

## 7月 第12回 朗読会

七夕間近の令和3年7月2日  
者・藍原ゆきさんをお招きし、『母の思い出』の朗読にあわせ、デュオ  
プレリュードへ長調などが演奏されました。  
ていた「作品に引き込まれた」か  
素敵なひとときとなりました。

~~~~~

についてご講演いただきました。また、著者のほか、「人間関係や時代背景を想起した」などの感想が寄せられました。

~~~~~

コンサート

・3日、朗読家・野田香苗さんによる朗読コンサートを開催しました。

マジ「第一組曲 プレリュード」が演奏されました。「ヴィオラ・ダ・ムーラ」などの感想が寄せられ、暑さを忘れさせてもらいました。

~~~~~

開館時間：午前9時～午後5時

休館日：月曜日

入館料：300円

念館

2-12-27

。『日本少国民文庫』を幼い
を知り理解が深まった「編
いた。
~~~~~  
とヴィオラ・ダ・ガンバ奏  
有三の隨想「一即多」や「母  
」、マレ「アルペジオによる  
ガンバの音色が洋館にあつ  
忘れ朗誦と音樂に聽きに入る  
~~~~~  
午前9時30分～午後5時
月曜日及び年末年始（12月29日～1
翌日と翌々日を休館
300円（20名以上の団体 200円）
中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助
「東京・ミュージアムぐるっとバス2021」和
左
右

コラム 「お月さまは、なぜ落ちないのか」

左は「主婦之友」連載第21回「新篇 路傍の石」第三章冒頭「お月さまは、なぜ落らないのか」の原稿です。作品の後半部、吾一が東京で文選工となつてしばらくたつ、ようやく一人前の日給をもらえるようになった頃、吾一の前に、おなじく文選工の得次という青年が現れます。得次は「お月さまはどうして落っこちないの」という弟の質問に「お天とうさまやお星さんと、仲よくお手てをつないでいるから」と答えたことを引き合いに出し、自分たちも手をつなぎあい、主人や自分のたまごではなく、だれもが落っこちないように働かなくてはならない、と語ります。



原稿「路傍の石 お月さまは、
なぜ落ちないのか 三」

第7回 三鷹市山本有三記念館スケッチコンテスト作品募集

四季折々の姿を見せる山本有三記念館を描いてみませんか。コンテスト終了後、受賞作品を山本有三記念館にて展示いたします。山本有三記念公園は入場無料です。お気軽にスケッチにお越しください！

集 期 間：令和3年10月1日(金)～12月12日(日)

・会場：三鷹市公会堂さんさん館
・日程：令和4年1月15日(土)～23日(日)

受賞作品展示：令和4年2月1日(火)～3月6日(日) 会場：三鷹市山本有三記念

スケッチコンテスト応募詳細につきましては、当記念館までお問合せください。ホームページをご覧ください。

事業報告 >

2月 山本有三記念館・三鷹ネットワーク大学共催講演会
「君たちはどう生きるか」—有三と『日本少国民文庫』の挑戦

日本近現代文学・児童文学を専門とする久米依子先生(日本大学教授)を講師にお迎えし、企画展『「日本少国民文庫が灯したもの」—若き編集者たちとの交流—』(会期:令和2年9月112日～令和3年3月7日)の関連講演会を令和3年2月7日に開催しました。「君たちはどう生きるか」—有三と『日本少国民文庫』の挑戦と題し、近年の「君たちはどう生きるか」テーマにも触れながら『日本少国民文庫』の編集を務めた吉野源三郎らの来歴や山本有三との関わり、文庫における役割等についてご講演いただきました。『日本少国民文庫』を幼いころに愛読していたという参加者のほか、「人間関係や時代背景を知り理解が深まった」「編集者たちの思いを知ることができた」などの感想が寄せられました。



左、ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者 藍原ゆきさん
右、朗読家 野田香苗さん

7月 第12回 朗読コンサート

七夕間近の令和3年7月2日・3日、朗読家・野田香苗さんとヴィオラ・ダ・ガンバ奏者・藍原ゆきさんをお招きし、朗読コンサートを開催しました。有三の隨想「一即多」や「母の思い出」の朗読にあわせ、デュマシ「第一組曲 プレリュード」、マレ「アルベジオによるプレリュードへ長調」などが演奏されました。「ヴィオラ・ダ・ガンバの音色が洋館にあった」「いた」「作品に引き込まれた」などの感想が寄せられ、暑さを忘れ朗読と音楽に聴き入る敵なひとときとなりました。

開館時間：午前 9 時 30 分～午後 5 時
休館日：月曜日及び年末年始（12 月 29 日～1 月 4 日）・月曜日が祝日の場合は開館し翌日と翌々日を休館
入館料：300 円（20 名以上の団体 200 円）
・中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭、「東京・ミュージアムぐるっとバス 2021」利用者は無料
アクセス：JR 中央線「三鷹駅」南口より徒歩 12 分、
JR 中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口（公園口）より徒歩 20 分

『路傍の石』の子ども像とその魅力

山田吉郎（鶴見大学短期大学部教授）

山本有三の代表作『路傍の石』を、作者自らはドイツの成長小説に類似した構想の下に書き進めたと述べているが、とくに主人公愛川吾一が伊勢屋に奉公にあがるまでの物語は、いわゆる児童文学的要素が濃いと言える。そこには吾一を取り巻く多彩な子どもたちの姿が鮮明な子ども社会の構図を浮かび上がらせている。

物語の展開の中で前半のクライマックスを形成しているのは、吾一の鉄橋ぶら下がり事件であろう。その事件を中心に子ども社会の姿が生き生きと描かれている。この当時吾一は高等小学の二年生（尋常小学六年級に該当）であり、新しくこの地にできる中学校への進学を志望する少年である。結局吾一は家庭の状況から中学進学を断念し、伊勢屋に奉公するようになるのであるが、ここに物語の大きな切れ目があるのである。吾一は伊勢屋という大人の社会の中に否応なく組み込まれてゆくのに対し、小学生時代の吾一は、京造や秋太郎、作次、おきぬ、さらに道雄らとともにぼぼ同年代の子どもたちの中で独自の集団を形成しており、そうした子どもたちの姿が、いわば群像と

して生き生きと描かれているところに、『路傍の石』前半世界の尽きせぬ魅力がある。

ところで、吾一たちは、子どもの年齢としてはある意味で微妙なところにあろう。現代では十歳の壁という言葉があるが、子どもたちが幼年期を経て心身ともに大きく変化する時期が十歳前後に訪れる。無論個人差はあるが、身体的にも大人への変化が兆し、精神面でも大人（親）からの自立、反発、批判、視野の拡幅などが見られてくる。そうした十歳の壁を越えたあたりの状況が、吾一とその周囲が形成する子ども社会に、不安定で微妙な影を落としているだろう。

ここで目を宮沢賢治に向ければ、賢治が生涯に唯一稿料を手にしたといわれる『雪渡り』という名作童話がある。その中で、狐の幻燈会への入場券を兄たちの分までもらおうとする四郎と妹のかん子に向かって、子狐の紺三郎が「兄さんたちは十一歳以下ですか」と尋ねる場面がある。四郎が十一歳よりも上だと答えると、紺三郎は、「それでは残念ですが兄さんたちはお断わりです。」と答える。そして、四郎とかん子は青白い大きな十五夜の月が

のぼった晩、幻想的な狐の幻燈会へと招かれてゆくのである。この「十一歳以下ですか」という言葉は、まさに先述のような子どもの成長の移り目に符合していると言える。

また、『銀河鉄道の夜』のジョバンニとカムパネラの場合、心理の動きはジョバンニに比しかカムパネラの方が大人のもつ冷静な客観的視点や視野の広さを、色濃く帶びている印象がある。これと類似した面が『路傍の石』の子ども像にも見られるではなかろうか。

さて、『路傍の石』の主人公愛川吾一は級長をつとめている。学業は優秀であり、相当の自負もある。また「おれは級長なんだから、先生の言つたことは、どんなことをしても守らなくちゃいけないんだ」という考えに支配されている。吾一は子どもたちの中で、一定の敬意と信頼を得ているが、その性格は自らを一つの枠や規律の中にはめ込むようなどころがあるとは言えるであろう。

こうした吾一と周りの子どもたちのそれぞれの個性を鮮やかに浮かび上がらせるものに、冒頭部近くで描かれる登校時の遅刻をめぐるエピソードがある。

この日は伊勢屋の秋太郎がなかなかやつて来ず、吾一は遅刻するのではないかとやきもきする。それに對して京造は、どつしりと構えている。級長をつとめている吾一は、「ひとりがこないからと云つて、自分まで遅刻するのはたまらない」と思う少年である。一方、京造は「おいてつちまうのか」と吾一に言つて待とうとする。この吾一と京造のがある。

組み込まれてゆく。いわゆる十歳の壁をくぐり抜け、大人的な心理や思考を身につけつつある子どもたちは、その後小学校の終了までは、基本的に子ども達中心の仲間社会の中で生きる。しかし、その後の子どもたちの進路が分岐してゆくに伴い、前掲の山本有三が語っていた子どもの世界は、それぞれの子どもたちの胸底に封印されてしまう。

『路傍の石』において、児童文学的要素はその一部にとどまるであろう。しかしながら、この小説の冒頭から四分の一ほどの分量しかもたない「子どもたちの世界」が、今なお読者を惹きつけてやまないのは、読者の胸底深く潜む子ども時代の景がノスタルジーを基軸にさまざまな感情を伴つて顕たあがつてくるからに他ならないであろう。

このエピソード以降、吾一は子ども社会の中で、『小英雄』のような扱いを受けることになる。作者の山本有三は記す。

子どもの世界は実力の世界である。腕っはの強い者が大将になる。学問のできる者が尊敬される。学問があつて、腕っはの強い者は、そのなかでも、最も崇拜されることになる。（中略）彼らの世界には、位も勲章もなければ、そのなかでも、もつときびしい、自然の格づけが存在していた。

こうした子どもの世界での愛川吾一の位置づけは、しかしながら、小学校を終えるところで幕を閉じる。伊勢屋に奉公するという大人社会の枠組みに

（付記）『路傍の石』の引用は『定本山本有三全集』第九卷（昭和五十一年六月、新潮社）に拠った。

山田吉郎（やまだよしろう）

昭和29（1954）年、神奈川県生まれ。
専門は日本近代文学、児童文学。主な論文に「山本有三『路傍の石』の構成—子ども社会への視角」（国文学解説と鑑賞）平成20年6月、「教材としての神沢利子『くまの子ウーフ』—幼児教育・小学校教育の視点から」（鶴見大学紀要）第55号、平成30年2月）などがある。

